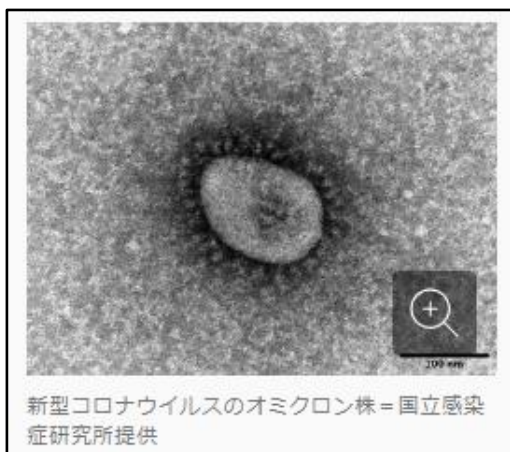


新型コロナ なぜオミクロンの「マイナーチェンジ」が続くのか

2022/6/23 日新聞



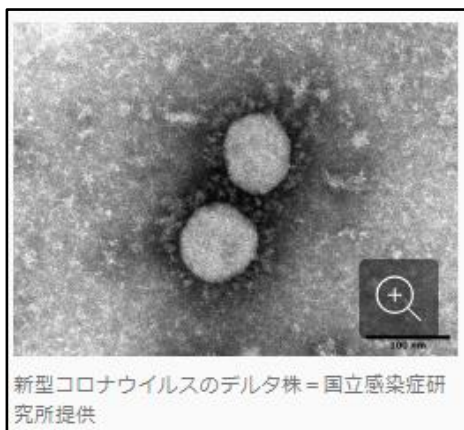
新たな変異が流行の波を生み出してきた新型コロナウイルス。以前の変異の仕方は、車で例えるならフルモデルチェンジのようだったが、オミクロン株が登場してからは、派生型の「BA・2」や「BA・5」などマイナーチェンジを繰り返している。オミクロンに取って代わる新たな変異株は現れないのだろうか。

【渡辺諒】

「変異株は関連性少ない」

アルファ株、デルタ株、オミクロン株……。いずれも世界保健機関（WHO）が「懸念される変異株」として、最も高い警戒度の分類に位置づけたものだ。2019年末に中国・武漢で新型コロナが確認されてから、この分類になったものは全部で5種に上る。

国内でも流行して感染者数が増えると、数カ月間である程度まで収束。その後、新しい変異株によって次の流行が起きるといった状況が続いてきた。



新型コロナウイルスのデルタ株=国立感染症研究所提供

WHOは「これら変異株は、それぞれに関連性が少なく、性質が大きく異なる」と説明する。

例えば、オミクロン株と21年夏に流行したデルタ株を比べると、人に感染する際の足かかりとなるウイルス表面の「スパイクたんぱく質」の変化は、オミクロン株の方で3倍多く見られた。オミクロン株の感染力が強いのは、このせいだ。

「こうした変異は、インフルエンザウイルスのA型では『大変異』という現象に当たる」。国立感染症研究所はそう解説する。

インフルエンザでもウイルス表面のたんぱく質が大きく変異することなどに伴い、感染のしやすさや病原性が変わる。1918年のスペイン風邪や09年の新型インフルエンザは、大変異によるものだ。A型だけにある現象という。

オミクロン株は「小変異」

インフルエンザの大変異は数年から数十年に1度しか起きないが、新型コロナでは大変異のような変化が数カ月単位で起きて、新しい変異株が次々と出現。しかし、今年に入っ



てオミクロン株が流行し始めると、少しずつ変異していく近縁種の登場が続いている。

オミクロン株の特徴

当初は「BA・1」という系統だったが、「BA・2」「BA・3」と順に続き、現在は「BA・5」まで出現した。ウイルスに起きる変異が、新しい株が登場した時より少ない。インフルエンザで言えば「小変異」と呼ばれる現象になる。

新型コロナのゲノム解析などに詳しい佐藤佳（けい）・東京大医科学研究所教授（システムウイルス学）は「オミクロン株に限れば、インフルエンザが小変異で毎年流行を繰り返すような状況になっている」と分析する。

感染研によると、インフルエンザの場合、主にA型とB型で小変異を繰り返すため、ヒトの免疫が長続きせず毎年冬に流行する。オミクロン株も小変異のような変化を続けているため、感染者数がデルタ株のように減りきっていないとの見方もある。

感染力が強いと……

では、なぜオミクロン株の流行後は他の変異株に置き換わらないのか。

東京大医科学研究所の佐藤佳教授（システムウイルス学）＝本人提供



東京大医科学研究所の佐藤佳教授（システムウイルス学）＝本人提供

佐藤さんは「強い感染力と、低い重症化リスク」を一因に挙げる。

「大変異のような変化は突如起きる。新しい変異株が出現したとしても、オミクロン株を上回る感染力やワクチンが効かない性質を持たないと、置き換わりづらい」とみている。

オミクロン株の重症化するリスクが低いことなどから、新型コロナの死亡率は季節性インフルエンザと比べて、年齢によってはインフルエンザと同等レベルにまで落ち着いている。「ヒト社会に共存しやすいという面もあるのかもしれない」

ただし、次の大変異の恐れがなくなったわけではない。

「ワクチンが効かず、感染力も強く、重症化しやすい変異株が出現することもある。仮に、感染力が強い新種の変異株が現れたとしても、病原性が低ければ今のような状況になるが、その後に病原性が高まる可能性もある。その時にワクチンなどによる免疫が下がっていると、大きな流行になることも考えられるので、今後も動向を注視していく必要がある」と話した。